

聖書：マルコの福音書 7：1～23

説教題：人を汚すもの

日時：2025 年 10 月 26 日（朝拝）

7 章 1 節は「さて、パリサイ人たちと、エルサレムから来た何人かの律法学者たちが、イエスのもとに集まった」と始まります。パリサイ人たちが最後に登場したのは 3 章 6 節でした。そこにはこう記されていました。「パリサイ人たちは出て行ってすぐに、ヘロデ党の者たちと一緒に、どうやってイエスを殺そうかと相談し始めた。」これを踏まえて 7 章 1 節を読むと、ただならぬ雰囲気があることが分かります。パリサイ人たちのもとにはエルサレムから来た律法学者たちも加わります。そして彼らはイエス様のもとに集まりました。これはいよいよイエス様を本格的に糾弾し、やがてイエス様を葬り去るための動きでした。彼らが見つけた問題は、弟子のある者たちが汚れた手で、すなわち洗っていない手でパンを食べていたことでした。これは衛生上のことではなく、儀式上のことです。なぜこれが問題なのかが 3～4 節で説明されています。「パリサイ人をはじめユダヤ人はみな、昔の人たちの言い伝えを堅く守って、手をよく洗わずに食事をするのではなく、市場から戻ったときは、からだをきよめてからでないと食べることをしなかった。ほかに、杯、水差し、銅器や寝台を洗いきよめることなど、受け継いで堅く守っていることが、たくさんあったのである。」

「昔の人たちの言い伝え」という言葉は、マタイの福音書の平行記事では「長老たちの言い伝え」と訳されています。つまり先人たち、ユダヤ人の指導者たちの教えということです。ユダヤ人は律法を大事にしましたが、その規定は生活の細部すべてを網羅しているわけではありません。ですから日々の具体的な生活の中で、律法をどのように適用すべきか、民はガイドラインを必要としました。その適用について先達の教えが積み重ねられ、人々の間で受け入れられて来た教えがあったのです。それらの教えは律法を決して犯すことがないように、律法の周りに柵を設けるような性質を持っていました。

ここで問題になっている儀式的な手の洗いきよめに関して言えば、律法が規定していたのは祭司についてのみでした。出エジプト記 30 章 19～21 節：「アロンとその子らは、そこで手と足を洗う。彼らが会見の天幕に入るときには水を浴びる。彼らが死ぬことのないようにするためである。」この規定をラビたちは一般の人々にも拡大して適用しました。それは重荷を負わせるためではなく、日常生活のすべてを神にさ

さげ、聖なるものにしようとする意図からでした。レビ記 20 章 26 節には「あなたがたは、わたしにとって聖でなければならない。主であるわたしが聖だからである」とあります。このような御言葉に基づき、祭司だけでなく、イスラエル全体が神と律法に献身していることを示すためでした。市場から戻った時にからだをきよめるのは、異邦人と接触して汚れたかもしれないからです。汚れとは死と悪魔の領域に属することであり、神との交わりを妨げるものと考えられました。他にも口に触れる食器や、からだを横たえる寝具まで、儀式的に洗いきよめることが行われていました。そのように代々受け継いで堅く守っているしきたりが沢山あったと書かれています。こうした伝統の中で生きる彼らにとって、イエスの弟子のある者たちがそれを行っていないのは看過できないことだったわけです。そこでパリサイ人と律法学者たちはイエス様に伺います。「なぜ、あなたの弟子たちは、昔の人たちの言い伝えによって歩まず、汚れた手でパンを食べるのですか。」

これに対するイエス様の言葉は厳しいものでした。イエス様はイザヤ書を引用し、その預言はまさにあなたがた偽善者について語ったものだと言います。「この民は口先でわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを礼拝しても、むなしい。人間の命令を、教えとして教えるのだから。」 「口先で敬う」とは、外面的な儀式を守り、神を敬っているように見せかけながらも、実際には心が神から離れているということです。神はそういう礼拝を「むなしい」と言われます。その理由が 8 節にあります。すなわち彼らが神の戒めを捨てて、人間の言い伝えを堅く守っているだけであるということです。ここに神の律法と、それに関する指導者たちの解釈、その教えには乖離があるということが言われています。あなたがたは神の言葉よりも人間の教えを大事にし、結果として神の戒めを捨てている——イエス様はそう糾弾されたのです。

その具体例として挙げられたのが、9 節以降に出て来る「コルバン」の話です。10 節に「モーセは、『あなたの父と母を敬え』、また『父や母をのしる者は、必ず殺されなければならない』と言いました」とあります。これは十戒の第 5 戒であり、明確な神の律法です。ところが当時の指導者たちはこう教えました。たとえ子どもが両親を支えるための財産を持っていたとしても、それをコルバン、すなわち神へのささげものです！と誓ったなら、その財産を両親のために使ってはならないと。どうしてそうなるのか？と一瞬不思議に思うかもしれません。この背後にあるのは誓いの神聖性です。

神にささげると誓ったものは決して取り消してはならない。必ず履行すべきであるという考えです。この場合、十戒の第五戒とぶつかります。それでも指導者たちが誓いを優先させるべきだとしたのは「神との関係の方が人間との関係より優先される」と考えたからでしょう。こうして彼らの教えのもとでは結局、人間の教えがより上位に置かれて神の律法が無にされていました。これでは神を敬っていることにはならないし、神を礼拝していることにはならない。イエス様は「このようなことが多く行われている」と言われました。

さて、このイエス様の言葉を私たちは今日の自分たちにどう当てはめるべきでしょうか。今日の箇所は何度も出て来る「昔の人たちの言い伝え」とか、4 節の「受け継いで堅く守っていること」とは、一言で言えば「伝統」と言えます。では、イエス様は伝統をすべて否定されたのでしょうか——そうではありません。先にも触れたように、律法（つまり聖書）は私たちの生活のあらゆる状況を事細かに規定しているわけではありません。ですから具体的な場面でどう考え、どう行動すべきかのガイドラインが必要です。その議論が生まれ、それが実践されるところには必ず伝統が形成されます。先達たちの知恵や経験が積み重ねられて行くのです。イエス様はそれ自体を否定されたわけではありません。

しばしばこの点に関して言われるのは長老教会がウェストミンスター信仰基準を告白するのは、まさにこの誤りを犯すものだという批判です。それはまさしく人間の教えに他ならない！と。それに対して「我々は聖書のみである」。そのように誇る人たちがいます。しかしそれは全くの見当違いです。仮に信仰基準を持たず、聖書だけに聞き従うと言っても、その解釈や実践においてその教会には必ず伝統が生まれます。牧師やリーダーたちの聖書の読み方や適用の仕方は、その教会の伝統また文化となります。こうした伝統を常に悪として排除し、いつもゼロから始めることが良いわけではありません。私たちが聖書を読んで抱く疑問や課題についての答えは、すでに先人たちが祈りと模索の中で多く見出して来ました。そのような霊的遺産を無視して、自分たちの方が優れているかのように振る舞うのは高ぶりです。そのようにしても結局恣意的で、行き当たりばったりで、一貫性のない意見しか出て来ませんし、あつという間に誤りの罫にはまりやすいのが現実です。ですから私たちは真摯な信仰に生きた先人たちから謙虚に学ぶべきです。

しかし一方で伝統や先人たちの意見を重んじるあまり、それを聖書と同等、あるいはそれ以上に置いてしまってはなりません。この時のユダヤ人たちはまさに「昔からの言い伝え」を律法と同じ重さに扱い、時には律法より優先させていました。そこに問題があったのです。同じ危険が私たちにもあることを忘れてはなりません。ですから私たちは「聖書だけが信仰と生活の唯一の基準」であることを明確にし続ける必要があります。私たちの信仰告白が聖書から外れたり、矛盾することを言っていないか、絶えず検証しなければなりません。あくまで聖書こそ神の言葉であり、第一の座を占めるべきものです。教会の信仰基準は聖書に対して「従」の関係にあり、「聖書のみ」の大原則にわたちがより良く生きるための助けとなるべきものです。この関係を決してひっくり返してはならない——そのことを改めて教えられるのです。

さてイエス様は 14 節以降で群衆を呼び寄せて言われます。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。外から入って、人を汚すことのできるものは何もありません。人の中から出て来るものが、人を汚すのです。」 イエス様は人々が誤った教えに導かれないように、このことを語られました。当時のパリサイ人や律法学者たちの教えは儀式的・外面的なことに終始していました。しかし汚れは外から入るのではない。人から出るものが人を汚すのだとイエス様は言われます。

弟子たちはこの話の意味を理解できず、イエス様に尋ねました。イエス様は「あなたがたまで、そんなにも物分かりが悪いのですか。分からないのですか」と嘆きつつ、改めて説明されます。外から入るものは人を汚さない。それは心に入るのではなく、腹に入り、やがて排泄される。すなわちトイレに出るだけである。それは人を汚さない。イエス様はこうしてすべての食物をきよいとされたとあります。これは後の、主にあってはすべての食物がきよいという教えにつながって行きます（ローマ書 14 章 14 節、I コリント 10 章 25～26 節等）。

ですから問題なのは外から入るものではなく、人の内側から出て来るものです。「内側から、すなわち人の心の中から、悪い考えが出て来ます」とイエス様は言われます。そして合計 12 の悪徳がリストされています。これについて色々な分析がなされます。それで分かることは最初の 6 つはすべて複数形で表現され、あとの 6 つはみな単数形で書かれているということ。つまり前半 6 つは繰り返し起こり得る行為的な罪を指し、後半 6 つは性格や態度を指すということです。また前半 6 つについて最初の 3 つと次

の3つは平行関係に並べられているという見方があります（1つ目の「淫らな行い」に4つ目の「姦淫」が対応し、2つ目の「盗み」には5つ目の「食欲」が対応し、3つ目の「殺人」には6つ目の「悪行」が対応する）。しかし結論から言えば、これらはサンプルとして挙げられたものであり、ある人は累積的効果を狙ったものであると言えます。つまりこういったあらゆる悪が人間の心から出て来るということです。人の心が、これらのたくさんの悪の生産工場なのだということです。エレミヤ書 17 章 9 節の言葉を思い起こします。「人の心は何よりもねじ曲がっている。それは癒やしがたい。だれが、それを知り尽くすることができるだろうか。」これこそが人を汚すものです。これに思いを向けず、ただ外側のことに気を配り、儀式的に自分をきよめたから、自分は神の前に聖いとするのは神の前に意味のないことです。「問題にすべきなのは人間の心だ」とイエス様は言われたのです。

この御言葉の前に立つ時、私たちはどうでしょうか。今日の御言葉は私たちをただ暗い思いにさせるものでしょうか。しかしイエス様は 14 節で群衆を呼び寄せた時、こう言われました。「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい。」イエス様がこう語りかけられたのは、このことがとても大事なことからです。ここにこそ真の幸いの道があるからです。自分の心の現実を悟らなければ人は真の救いを求めません。パウロはローマ人への手紙 7 章 24 節でこう叫びました。「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか。」この嘆きの中にこそ救いへの真の入口があります。

私たちにとっての福音は、神はこのようなどうしようもない私たちの心をきよめ、新しくしてくださるということです。罪を犯したダビデは、詩篇 51 篇 10 節でこう祈りました。「神よ 私にきよい心を造り 揺るがない霊を私のうちに新しくしてください。」彼は自分が生まれながら神の御前に罪ある存在であることを嘆きつつも、神がその心をきよめてくださると確信して祈りました。預言者エゼキエルも 36 章で、神がきよい新しい心を授けてくださることについて次のように預言しました。36 章 25～27 節：「わたしがきよい水をあなたがたの上に振りかけるそのとき、あなたがたはすべての汚れからきよくなる。わたしはすべての偶像の汚れからあなたがたをきよめ、あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うよう

にする。」 この約束はイエス・キリストの十字架によって実現するものとなりました。ヘブル人への手紙 10 章 21～22 節にはこう述べられています。「また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。」 キリストの十字架を通して罪を赦され、新しい心をいただいた者たちは、真心から神に近づき、礼拝をささげることのできる者とされます。もちろん新しい心をいただいても、地上にある限り、私たちは完全ではありません。しかしヨハネの手紙第一 1 章 9 節は約束します。「もし私たちが自分の罪を告白するなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、私たちをすべての不義からきよめてくださいます。」 この約束に支えられながら、私たちはさらに聖められ続ける道を歩むことができます。

汚れは外側にあるのではなく、私たちの内側にあります。一番の問題は私たちの心です。けれどもイエス様はその心をきよめるために来てくださいました。十字架の身代わりの死をもって私たちの内側を新しく造り変えてくださいます。そのお方が今日も「みな、わたしの言うことを聞いて、悟りなさい」と語りかけておられます。この言葉に聞いて、自分ではどうすることもできない心の汚れを認めて、イエス様のもとへ逃れ、きよく新しい心をいただく者でありたいと思います。心が変わえられる時、そこから良いものがあふれ出るようになります。その心をもって、神ことばこそを喜び、大事にし、これに従う生活をもって、神への感謝と真心からの礼拝生活をささげる者とされたいと願います。